

今から

2006. 10. 1 (日)
石川・よろこびの集いにて
ベック兄メッセージ (メモ)

引用聖句

ヨハネの黙示録 1章8節

神である主、常にいまし、昔いまし、後に来られる方、万物の支配者がこう言われる。「わたしはアルファであり、オメガである。」

ヨハネの黙示録 22章20節

これらのことをあかしする方がこう言われる。「しかり。わたしはすぐに来る。」アーメン。主イエスよ、来てください。

どうして今日は福音集会在先になるかと言いますと、もし一便早い便で帰ることが出来たら…という話なのです。なぜなら明日の朝、ドイツに行けるようになったからなのです。明日は七時前に家を出なくてはいけないのです。そして、出発前のいろいろな準備がありますから。

実はこの間の木曜日まで、検査の結果次第で大丈夫かなあと思っていたのです。(医者にはドイツへ行くか入院するかのどちらかだとはっきり言っていたからです。)私は二年半前から白血病になり、医者はこの病気は治るものではないとはっきり言っています。ですから、木曜日に病院へ行ってきました。その結果「ドイツのあとでもいいですよ。けれども日本へ戻って来たらすぐ来てください」と。十月の三十日にまた、検査のために病院へ行かなければなりません。私は別に全然心配していませんし、癒してください、とさえも祈ったことはありません。なぜなら、自分のために何が一番よいか分からないからです。ですから、「イエス様、よろしく。お任せいたします」としか言えなかったのです。

ドイツのよろこびの集いは、一番神経を使うものです。なぜなら日本人だけではなく、ドイツ人も参加するからです。そして日本人が話すことを、私がドイツ語に訳さなくてはいけないし、日本人にまた逆に訳さなければならないからです。そういうことや個人的な交わりのためにも、非常に時間的に大変なのです。是非覚えて祈っててください。

ドイツにひとつの諺があるのです。『昨日は過ぎ去った。明日はまだ来ていない。今日のために主は助けてくださる』。いいですね。

さて今日の題名は、今、兄弟が言われましたように、『今から』という題名です。これこそ、「恵み」なのではないでしょうか。「今から」とは…

今、読みました個所によると、主とはいったいどういうお方なのでしょう。

ヨハネの黙示録 1章8節

後に来られる方、

ある姉妹は、ちょっとショックを受けて言ったのです。「私は今まで十字架の上で犠牲になられたイエス様を、家族の人々に、知り合いの人々に宣べ伝えました。この十字架の上で、罪滅ぼしのために犠牲になられたイエス様を紹介しただけではなく、このイエス様は復活なされた。生きておられる方であることも紹介したのです。しかし、忘れたことがあります。『後に来る方』を宣べ伝えなかったのです」と。これは確かに大失敗です。

イエス様は来られます。私たちよりもむしろ、イエス様がそれを望んでおられるに違いありません。イエス様は、再臨なさりたくて仕方がないのではないのでしょうか。救われるべき人が救われるとその瞬間、イエス様は来られます。それは今日、飛行機が出る前かもしれないかもしれません。イエス様は再び来られるお方です。このイエス様は、「しかり、わたしはすぐに来る」。初代教会の人々は、「アーメン。主イエスよ、来てください」と。

「主イエスよ、来てください」。これは、毎日私たちの祈りとなるべきではないのでしょうか。

ドイツの今までの憲法でしたら、「神」という言葉が出て来たのです。それにより神を畏れることの大切さが強調されていました。今の新しいEUの憲法の中では、「神」という言葉は出て来ません。その言葉により宗教戦争が始まるからです。ヨーロッパの大部分の国々では、神とはもちろん天と地を創造されたお方であり、十字架の上で犠牲になられたイエス様のことなのです。イスラム教徒の人たちはそれを絶対に認めません。ですから神無しの憲法にしようと。結局神を畏れる恐れはないのです。もうヨーロッパはダメですね。

そしてヨーロッパから、必ず反キリストが出てきます。今のローマ法王はドイツ人なのです。頭がいいです。けれども政治家にすぎません。神を畏れる恐れはありません。人間的に仲良くしましょうということにすぎません。イスラム教徒の神と、聖書の神とは同じだと言っていますが、そうすれば、ある意味で円満にいくのです。けれど、この平和とは、主の与える平和ではありません。悪魔の勝利となるのです。ですから、現実を見るなら、がっかりです。けれど、「イエス様の再臨は近い」と考えると、やはり嬉しくなります。

多くの人たちは、何か大変なことが起こると感じていますが、いったいどういうことになるのでしょうか。このままの状態が続くはずはありません。けれど、次に起こることとは、いったい何でしょうか。この不安が今の時代の多くの人々に重苦しい圧迫をもたらし、識別力を失わせています。将来はどういうものになるのでしょうか。この質問に対して答えられる人は、いったいだれなのでしょう。

確かに多くの人々は、自分たちの頭でこの謎を解こうとします。その結果、別のものとなります。結局、人々は易者や星占い、トランプ占いによって、悪魔に尋ねているのです。そして、魔術や悪魔の力の中に陥るのです。

ある悩んでいる母親は電話で言ったのです。娘はもう二十五歳になりますが、家出してしまいました。居場所も分かりません。娘は占い師に頼ったのです。結局占い師は「家出しなさい」と。娘はその言葉に従ったのです。

私たちはだれに尋ねようとするのでしょうか。それは将来に関して、ただ一つの権威をもっているもの、つまり「聖書」です。

私たちはこの神のみことばの権威を認めるのでしょうか。真理そのものであり、嘘を知らないイエス様は言われました。「この天地は滅び去ります」と。

マタイの福音書 24章35節

この天地は滅び去ります。しかし、わたしのことばは決して滅びることがありません。

マタイの福音書 5章18節

まことに、あなたがたに告げます。天地が滅びうせない限り、律法の中の一点一画でも決してすたれることはありません。全部が成就されます。

私たちは自信をもって、将来を聖書に尋ね、聖書に目を光らせたいものです。

ヨハネ伝12章の中で、イエス様は次のように言われました。イエス様は多くのことを話されたのですが、多くの方はそれをやはり一つの教えだと言いますけれど、それは違います。イエス様の一つ一つのことばは、イエス様ご自身の啓示そのものです。

私たちが何と何と何を信じるかは、別にどうでも良いことです。しかし、だれを知っているのか。つまり「イエス様を知っているかどうか」が、大切なのです。

次のことばも、やはりイエス様の啓示です。

ヨハネの福音書 12章46節

わたしは光として世に来ました。わたしを信じる者が、だれもやみの中にとどまることのないためです。

すばらしいことばではないでしょうか。「わたしは光です」と。宗教家ではありません。昨日も今日もいつまでも、イエス様は「光」そのものです。愛の光、平和の光、希望の光そのものです。

イエス様を「光」として知るようになる者はだれでも、その人の人生の中で、すべてが新しくなります。光に照らされることを拒まない人、また自分が過ちを犯す者として、全く無価値な者として、まことの光であるイエス様のみもとに来る者は、拒まれません。受け入れられ、救われます。そして、光に来る人は罪から離れようとします。

聖書に記されています。

コリント人への手紙・第二 6章14節

不信者と、つり合わぬくびきをいっしょにつけてはいけません。正義と不法とに、どんなつながりがあるでしょう。光と暗やみとに、どんな交わりがあるでしょう。

長い間集会に来ている姉妹なのですが、未信者と関係を持つようになって、妊娠しました。けれど赤ちゃんはそのまま亡くなったようです。相手である彼を捨てるのは罪ではないかと言うのです。

光と暗やみとに、どんな交わりがあるでしょう。信者と未信者とはどういう関係があるのでしょうか。無いのです。多くの人々は、集会の考え方は狭い、厳しいと言います。集会の考え方は、別にどうでもいいですが、「聖書は何と言っているか」。それがポイントです。そして聖書を無視すると、その結果はやはり祝福がないのです。

「わたしはまことの光です」と、イエス様お一人だけがおっしゃることができたのです。私たち人間は、光ではありません。やみです。人間の内側には、暗さと不純と邪（よこしま）と偽善があります。ですから多くの人々は、光であるイエス様と関係を持ちたくないのです。

あるアルコール中毒者は言ったのです。恐ろしいものが三つあると。第一番目、警察。第二番目、税務署。第三番目、聖書だと。

聖書を通して、主は語りたいと思っておられます。イエス様の時代の大部分の人々は、やがてそのことが分かったのです。

イエス様の判断は、厳しい判断です。

ヨハネの福音書 3章19節

光が世に来ているのに、人々は光よりもやみを愛した。その行ないが悪かったからである。

ちょっと考えられないのではないのでしょうか。光よりもやみを愛する人がいるのでしょうか。現実はそのようなのです。それはどうしてでしょう。「その行ないが悪かったからである」と。結局、正直になりたくなければ、祝福を失います。イエス様の呼びかけとは、「わたしのもとに来なさい。わたしは光です」。光のもとに行きたくない人とは、自分の過ちを隠す者であり、正直になりたくないという思いの表われです。結局不幸への道そのものとなるのです。

人間にとって最も大切なことは、

- ・光に照らされること。
- ・罪の赦しを得ること。
- ・そして光であるイエス様との交わりを持つことです。

ですから、主イエス様を信じることは、イエス様のことが分かること、理解することではありません。「光」そのものの方のもとに来ることです。つまり、主イエス様のもとに来ることです。そして、イエス様のみもとに来る者は、間違いなく受け入れられて、その債務は赦されます。

第一ヨハネ1章7節は、聖書の中の真珠のようなものです。宝物です。

ヨハネの手紙・第一 1章7節

もし神が光の中におられるように、私たちも光の中を歩んでいるなら、私たちは互いに交わりを保ち、御子イエスの血はすべての罪から私たちをきよめます。

交わりの源は光に照らされることです。光に照らされなければ、人間同士も本当の意味での交わりを持つことは出来ません。ましてや、聖なる主と交わることは出来ません。

最近示されたことは、ヤコブの言っていることです。すなわち、「悪魔に抵抗しなさい」。いろいろな人々が本当に悩んでいます。苦しんでいます。どうしましょうか。

一般的に言われるのは、光であるイエス様のところに行けばいいでしょう。自分のわがまま、過ちを告白すればいいのではないかと。けれど、それで果たして十分なのでしょうか。

多くの場合それは、悪魔の惑わしのわざです。イエス様は確かに悪魔のわざを滅ぼすために来られましたし、イエス様は勝利者です。けれども人間はイエス様のように、「悪魔よ退け。おまえと関係を持ちたくない。私はイエス様の血によって守られているから感謝します」と、この態度を取る必要があるのです。悪魔の力は、私たちの力よりもずっと大きいものです。私たちは弱い者に過ぎませんが、「悪魔よ退け」という態度をとるなら、悪魔は太刀打ちすることも出来ません。

イエス様の流された血は、聖める力を持つだけでなく、守る力も持つものです。ですから、このヨハネ第一の手紙1章7節のみことばは、本当にすばらしいのです。

ヨハネの手紙・第一 1章7節

もし神が光の中におられるように、私たちも光の中を歩んでいるなら、私たちは互いに交わりを保ち、御子イエスの血はすべての罪から私たちをきよめます。

意識して犯した罪だけではなく、無意識に犯す罪は山ほどあります。ですから、「すべての罪から私たちをきよめる」と記されているのです。

まことの満足を得る秘訣は、暗やみから脱出して光であるイエス様のみもとに行くことです。イエス様はすべてを新しくしてくださるのです。ですからイエス様の呼びかけは、「やみの中を歩かなくてもいい。何も隠さなくても大丈夫。わたしに従いなさい。光であるわたしに従う者は、決してやみの中を歩むことはありません。いのちの光をもつのです」。いのちの光とは、もちろんイエス様ご自身のことです。

パウロは、エペソにいる兄弟姉妹に次のように書いたのです。

エペソ人への手紙 5章8節。

あなたがたは、以前は暗やみでしたが、今は、主にあつて、光となりました。光の子どもらしく歩みなさい。

あなたがたは光となったので大丈夫、なのではありません。パウロが強調したのは、あなたがたは「主にあつてのみ光である」ということ。すなわち、光であるイエス様から離れて自分勝手に生活したり、自分の知恵や力に頼ると、一度にダメになります。光である主につながっているときにのみ、「わたしは光である」とイエス様ははっきりおっしゃられました。「わたしを離れては、あなたがたは何にもすることが出来ないし、わたしから離れたら、あなたがたは救われていても相変わらず暗やみです」と。

コロサイ書に、次のように書かれています。

コロサイ人への手紙 1章13節

神は、私たちを暗やみの圧制から救い出して、愛する御子のご支配の中に移してくださいました。

これが救いです。神は、私たちを暗やみの圧制から救い出して、愛する御子のご支配の中に移してくださいました。結局イエス様は、私たちの助け手、救い主になろうと思ってくださるお方というだけではなく、「私たちの主」となられなければ、人は簡単にとんでもない方向に行ってしまうのです。

「暗やみの圧制と、御子主イエス様のご支配」と書かれています。何という違いなのでしょう。ここでも同じことが言えます。すなわち、もし私たち信じる者がイエス様に頼らなければ、全ての努力は全く無駄であり、的外れの行動になります。

ですから、捕えられた者として走りましょう。「うしろのものを忘れ、目標を目指して走ろうではないか」とパウロはよく書いたのです。

- ・走る者の心構えは、いったいどういうものなのでしょうか。
- ・イエス様を知るようになってからの心構えは、どういうものであるべきなのでしょうか。

ピリピ書の3章。パウロがローマの刑務所の中で書いたことばです。

ピリピ人への手紙 3章12節から14節

私は、すでに得たのでもなく、すでに完全にされているのでもありません。ただ捕えようとして、追求しているのです。そして、それを得るようにとキリスト・イエスが私を捕えてくださったのです。兄弟たちよ。私は、自分はすでに捕えたなどと考えるではありません。ただ、この一事に励んでいます。すなわち、うしろのものを忘れ、ひたむきに前のものに向かって進み、キリスト・イエスにおいて上に召してくださる神の栄冠を得るために、目標を目ざして一心に走っているのです。

「栄冠を得るために」、救われるためではなく、「栄冠を得るために」目標を目ざして走っているとパウロは告白したのです。

前に読みました黙示録の22章12節をお読みいたします。

ヨハネの黙示録 22章12節

「見よ。わたしはすぐに来る。わたしはそれぞれのしわざに応じて報いるために、

わたしの報いを携えて来る。」

大切なのは、イエス様の再臨を信じるのではなく、期待することです。イエス様のものになった人々はみな例外なく、イエス様はいつか来られると信ぜざるを得なくなります。けれども、いつかよりも、「今日かもしれない」と考えるべきではないでしょうか。イエス様を本当の意味で愛している人々は、「イエス様、早く来てください」と祈るべきではないでしょうか。

パウロは多くの手紙を書いたのです。一番最後に書いた、殉教の死を遂げる直前の手紙がテモテ第二の手紙なのです。そのときは、間もなくネロという皇帝によって殺されると分かったのです。その時彼は次のように言えたのです。なかなか私たちは言えません。

テモテへの手紙・第二 4章7節、8節前半

私は勇敢に戦い、走るべき道のりを走り終え、信仰を守り通しました。今からは、義の栄冠が私のために用意されているだけです。かの日には、正しい審判者である主が、それを私に授けてくださるのです。

「今からは」、これが大切です。「今からは…、(つまり)これが終われば…」。パウロですからやはり当然言えたのでしょ

う。更にパウロは続いて書いたのです。「私だけでなく、主の現われを慕っている者には、だれにでも授けてくださるのです」と。ですから、私たちは主の現われを慕っているかどうか問題となるのではないのでしょうか。

イエス様の現われを慕う者、すなわち、首を長くして心から待ち望む兄弟姉妹だけが、主を知らない人々にとって魅力的となり、用いられるようになるのではないのでしょうか。私たちは再び来られるお方としてのイエス様を、見る事が許されています。

私たちの主はすぐに来られます。私たちが考えているよりもずっと早く、イエス様は再臨なさいます。

そもそも最も確実なことは、「イエス様の再臨」です。本当にイエス様は来てくださいます。イエス様は今、来つつあります。

イエス様は今晚十二時に来てくださるということが確定的になったとしたら、いったい私たちはどのような反応を示すのでしょうか。

イエス様の呼びかけ、絶えざる呼びかけとは、「おいで、わたしのところに来なさい」。結局、「おいで」。救われるために必要なことは、イエス様のところに行くことです。

ある兄弟は、家庭集会の前に自分の教え子たちだけではなく、先生たちも案内しました。彼はあるとき、E-mailを出したらしいのです。「疲れているなら、いらっしやい」と。来たのです。「疲れたから来た」と言ったのです。イエス様は疲れた人々、悩んでいる人々しか呼べないのです。疲れたり、悩んだりしている人しか来ないからです。・・・

(テープ切れ、B面に)

・・・苦しみ、疲れ悩んでいることは恵みです。主は、一時的な問題の解決よりも、より確実な解決を与えたいと望んでおられます。イエス様の呼びかけは結局、神の子とさせていただくためです。

初代教会の人々は、はっきりとした確信を持っていました。

ヨハネの手紙・第一 3章1節、2節前半

私たちが神の子どもと呼ばれるために、— 事実、いま私たちは神の子どもです。— 御父はどんなにすばらしい愛を与えてくださったことでしょうか。世が私たちを知らないのは、御父を知らないからです。愛する者たち。私たちは、今すでに神の子どもです。

いつかそうなるのではありません。今現在私たちは、天と地を材料なしで、無からお造りになられたお方の子どもです。これこそ考えられない恵みです。なぜなら、自分の努力の結果、聖書の勉強をした報いではないからです。けれどもイエス様は、救われるために、「おいで、おいで」と呼んでおられるだけではなく、報いを受けるためにも呼んでおられます。イエス様は報いるために来られる、と書かれています。

マタイ伝 25章の22、23節をお読みいたします。

マタイの福音書 25章22、23節

二タラントの者も来て言った。『ご主人さま。私は二タラント預かりましたが、ご覧ください。さらに二タラントもうけました。』その主人は彼に言った。『よくやった。良い忠実なしもべだ。あなたは、わずかな物に忠実だったから、私はあなたにたくさんのお金を任せよう。主人の喜びをともに喜んでくれ。』

どのようにして、私たちはイエス様を知るようになったのでしょうか。ただ、主の恵みによるのです。主は、みもとに来る者を決して決して拒まない、と約束してくださったから、主が受け入れてくださったことを信じることができ、確信することができました。

赦されているという確信を、なぜ持つことができるのでしょうか。それは、イエス様は嘘つきではないからです。必ずご自分の約束を守るお方であられるからです。

私は赦されているという確信の結果は何かと言うと、愛と感謝の表われとして、自分の人生は今からただイエス様お一人のものとなるべきである、ということになるに違いありません。救われることは確かに大切です。すばらしいことです。けれども私たちは、主に仕えるために、また、主の再臨を待ち望むために救われた、と聖書は語っています。

よく知られている個所なのですが、もう一度読みます。テサロニケ第一の手紙1章です。パウロは三週間だけこの町で福音を宣べ伝え、イエス様を紹介した結果として、多くの人々が導かれただけではなく、模範的なキリスト者になったのです。

テサロニケ人への手紙・第二 1章9節、10節

私たちがどのようにあなたがたに受け入れられたか、また、あなたがたがどのように偶像から神に立ち返って、生けるまことの神に仕えるようになり、また、神が死者の中からよみがえらせなされた御子、すなわち、やがて来る御怒りから私たちを救い出してくださるイエスが天から来られるのを待ち望むようになったか、それらのことは他の人々が言い広めているのです。

彼らの救いの結果とは、「主に仕えること」。それから、「イエス様を待ち望むこと」でした。

主に仕えていこうと望む者、またイエス様の再臨を待ち望む者は、人殺しと呼ばれている悪魔の攻撃的になります。救われている者は救われています。救われている者は永久的に主のものです。悪魔でさえもそれを認めざるを得ないのです。

けれど悪魔の目的とは、救われた人々が

- ・主に仕えないように、
- ・主の同労者にならないように、
- ・主の再臨を待ち望まないように

ということです。

しかし、イエス様ははっきり言われました。有名な山上の垂訓の中です。

マタイの福音書 6章24節

だれも、ふたりの主人に仕えることはできません。一方を憎んで他方を愛したり、一方を重んじて他方を軽んじたりするからです。あなたがたは、神にも仕え、また富にも仕えるということはできません。

厳しいことばです。

イエス様の弟子になったヤコブも、「そうだ、イエス様の言われたとおりに」と言ったのですが、大変厳しいことばを使って信じる者に書き記したのです。

ヤコブの手紙 4章4節

貞操のない人たち。世を愛することは神に敵することであることがわからないのですか。世の友になりたいと思ったら、その人は自分を神の敵としているのです。

イエス様は、救われた人々に報酬、王冠を分け与えたいと望んでおられます。パウロはコリントにいる人々に次のように書いたことがあります。コリントの教会は模範となる群れではありませんでした。パウロの悩みの種でした。コリント第一の手紙3章を読むと、結局二種類の信者について書き記されている箇所があります。

コリント人への手紙・第一 3章11節から15節

というのは、だれも、すでに据えられている土台のほかに、ほかの物を据えることはできないからです。その土台とはイエス・キリストです。もし、だれかがこの土台

の上に、金、銀、宝石、木、草、わらなどで建てるなら、各人の働きは明瞭になります。その日がそれを明らかにするのです。というのは、その日は火とともに現われ、この火がその力で各人の働きの真価をためすからです。もしだれかの建てた建物が残れば、その人は報いを受けます。もしだれかの建てた建物が焼ければ、その人は損害を受けますが、自分自身は、火の中をくぐるようにして助かります。

救われている者は救われているけれど、ある人は報いを受け、ほかの人は損害を受けるということです。その火が私たちの生活を明らかにします。すなわち再臨の日が、金、銀、宝石と、木、枯れ草、わら、すなわちイエス様から出た物か、または、自分から出た物かを明らかにするのです。

やはり、山上の垂訓の中の最も厳しいことばとは、マタイ伝7章に出てくることばではないでしょうか。イエス様の口から出たことばですから、間違いなくそうです。

マタイの福音書 7章21節から23節

わたしに向かって、『主よ、主よ。』と言う者がみな天の御国にはいるのではなく、天におられるわたしの父のみこころを行なう者がはいるのです。その日には、大ぜいの者がわたしに言うでしょう。『主よ、主よ。私たちはあなたの名によって預言をし、あなたの名によって悪霊を追い出し、あなたの名によって奇蹟をたくさん行なったではありませんか。』しかし、その時、わたしは彼らにこう宣告します。『わたしはあなたがたを全然知らない。不法をなす者ども。わたしから離れて行け。』

もし「ある者」と書いていれば、少数の人でしょうが、「大ぜい」と書いています。「大ぜい」と。そういう人々は自分では救われていたと思い込んでしまったに違いありません。また自分は主に仕えていると本当に思っていたでしょう。けれど間違いでした。的外れでした。主は、「わたしはあなたがたを全然知らない」と。

イエス様は救われている人々をよく知っておられます。昼、夜彼らのためにとりなしていただきます。「わたしはわたしの羊を知っている」と、イエス様は何回も言われたのです。もしイエス様に、「わたしはあなたがたを全然知らない」と言われたなら、もう望みはありません。

失われるいのちは、何と悔やまれることか。それは取り戻すことも取り替えることもできません。永遠の実を結んだいのち。これは大きな喜びであり、勝利です。もしそのとき、イエス様が私たちに次のように言うことがおできになれば幸いです。

マタイの福音書 25章21節

その主人は彼に言った。『よくやった。良い忠実なしもべだ。あなたは、わずかな物に忠実だったから、私はあなたにたくさんの物を任せよう。主人の喜びをともに喜んでくれ。』

私たちの生活に何が残るのでしょうか。私たちは本当に御霊によって歩み、御霊によって進みイエス様のために生活したか、それとも自分から自分のために生活したかのどちら

なのでしょうか。その日が、それを明らかにします。

パウロは、ローマにいる兄弟姉妹たちに大切なことを書いたのです。

ローマ人への手紙 13章11節

あなたがたは、今がどのような時か知っているのですから、このように行ないなさい。あなたがたが眠りからさめるべき時刻がもう来ています。というのは、私たちが信じたころよりも、今は救いが私たちにもっと近づいているからです。

「あなたがたは」、もちろん、あなたがた信じる者のことです。「このように行ないなさい」、知っているだけでは十分ではなく、はっきりとした態度を取ってもらいたいと…。

「救い」とは何ですか。「救い主」です。すでに、イエス様はそこまで近づいておられます。

12節から14節

夜はふけて、昼が近づきました。ですから、私たちは、やみのわざを打ち捨てて、光の武具を着けようではありませんか。遊興、酩酊、淫乱、好色、争い、ねたみの生活ではなく、昼間らしい、正しい生き方をしようではありませんか。主イエス・キリストを着なさい。肉の欲のために心を用いてはいけません。

これは命令です。自分の力で守るものではありません。ですから、徹頭徹尾、主に拠り頼まなければなりません。イエス様の再臨に対する生き生きとした希望から、清くなるという力も湧き出てきます。実際生活において、罪に支配されている者が、イエス様の再臨を待っているなどということはありません。

前に読みました、ヨハネ第一の手紙3章3節を読むと、次のように書かれています。

ヨハネの手紙・第一 3章3節

キリストに対するこの望みをいただく者はみな、キリストが清くあられるように、自分を清くします。

もう一箇所、コロサイ書3章。

コロサイ人への手紙 3章3節、4節

あなたがたはすでに死んでおり、あなたがたのいのちは、キリストとともに、神のうちに隠されてあるからです。私たちのいのちであるキリストが現われると、そのときあなたがたも、キリストとともに、栄光のうちに現われます。

3章1節前半

こういうわけで、もしあなたがたがキリストとともによみがえらされたのなら、上にあるものを求めなさい。

そこにはキリストが神の右に座を占めておられます。あなたがたは、「地上のものを思わず、天にあるものを思いなさい」。

私たちの生活において、イエス様の再臨に対する希望が、あらゆる悩みに耐えるための、もっとも大きな力なのではないでしょうか。

「イエス様は近い」。「イエス様はすぐに来られる」と絶えず思うべきではないでしょうか。

もうちょっとでイエス様は来られます。これこそが初代教会の兄弟姉妹の力の源、喜びの根拠だったのです。「イエス様は今日かもしれない」という希望の光によって毎日をささげることが、主は望んでおいでになります。

イエス様の再臨という希望が、初代教会の時代ほど生き生きとしていた時はなかったのです。そして当時ほど、イエス様の予言が生き生きと力強かった時もなかったのです。

イエス様が来られると期待している者はだれでも、主からの使命を一秒も早く行なわなければなりません。すなわち、「全世界に出て行って、全ての造られた者に福音を宣べ伝えなさい。(マルコの福音書16章15節)」

イエス様は、みことばのうちに非常にはっきりと語っておられます。イエス様はこんにちの時代においても、世界の出来事を通してはっきりと分かるように語っておられます。すなわち、「その時は近い」。

「イエス様はすぐに来られます」。この期待を持つ人々こそ幸せではないでしょうか。

了